

## 古墳出現期、社会情況の考古学的研究

渡 邊 信 洋

本稿では、我が国での国家形成を語るうえで重要な、古墳出現期における中河内と大和の社会を復元することを目的として研究を行った。

研究を行うに当たっては時間軸の設定から行った。具体的には当該期における土器のうち、各遺跡で一定量の出土が見込まれる甕と高杯に注目して編年を試案し、第1期から第5期に区分した。なお、庄内式土器が出現する第1期を庄内式期古相、庄内式土器が盛行する第2期と第3期を庄内式期新相、庄内式土器が衰退して布留式土器が出現する第4期と第5期を布留式期古相として大別した。

次に、提示した編年試案に古墳出現期を位置付けることを行った。その鍵となる最古の古墳については、弥生時代の墳丘墓と比べて隔絶した規模を誇る箸墓古墳に求めた。箸墓古墳は表採や発掘によって得られた土器をもとに第4期に出現したと考えられるので、古墳出現期は第4期に比定した。

しかし、古墳が出現する以前、つまり箸墓古墳に埋葬された人物が生きていたときから弥生時代とは異なる新しい社会が始まっていたことは十分に考えられるのであり、故に第4期以前についても注意を払うことにした。そこで、本稿では土器編年の各期を約20～25年程度の時間幅で考え、人の一生が十分に当てはまるであろう約100年前まで、つまり第1期まで遡って対象とする時期とし、これら第1期から第4期までを古墳出現期と位置付け、研究を行うことにした。なお、第1期以降は庄内式土器が出現し、外来系土器が多量に出土するようになるという、それ以前にない現象が認められることから、この類推は極端に間違っていることはないと思われる。

次に、研究を行うにあたっての予備作業として、復元すべき社会の観察の仕方について考えた。

その結果、社会を「政治・経済・文化という3つの制度、及び、それらの意識的・無意識的に生み出す人間の日常行動全体（以下、これを「社会情況」呼称する）、という4つの要素（サブシステム）の相互連関によって構成されるシステム」と定義付け、これら各要素（サブシステム）を観察することこそが社会を復元することに繋がるという結論に至った。そして、本稿においては人間の活動そのものを重視する立場から、社会情況を観察することで社会を復元する方法を選択した。

社会情況を観察する際にもっとも適切な対象物は集落遺跡であると考えた。なぜなら、人間のライフサイクルを「出生→生活→死亡」という3段階に区分したとき、活動のほぼすべては「生活」の段階で行われるのであって、その基盤である集落遺跡にこそ多岐に渡る情報が含まれているはずであると想定したからである。

故に本稿では集落遺跡を観察することで当時の社会情況について検討し、古墳出現期の社会を復元することにした。その際、河川の付け替えが行われる以前の大和川を旧大和川として復元した。

さて、中河内と大和の各地域を観察すると、以下の点が確認できた。

[中河内]

- ① 旧大和川流域沿いに多くの遺跡（群）が存在する。特に支流の長瀬川流域沿いに立地する東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡などが存在する地域と加美遺跡・久宝寺遺跡などが存在する地域は継続期間や遺構の検出情況を考慮したとき、広大な面積を有する一つの集落遺跡と考えられる。
- ② 旧大和川流域沿いの遺跡は主として庄内式土器を使用し、それ以外の地域の遺跡は主として第Ⅴ様式系土器を使用する傾向が窺える。
- ③ 外来系土器は庄内式期新相段階に急激に増加する傾向にある。またその分布は西岩田遺跡・加美遺跡・久宝寺遺跡・本郷遺跡・船橋遺跡などの旧

大和川流域沿いの遺跡に集中する。

- ④ 外来系土器の種類については、吉備系・山陰系・讃岐系などの西日本の土器が多く、東海系・北陸系などの東日本の土器が少量混じる。故に中河内では西日本との交流は盛んであったものの、東日本との交流はあまりなかったと考えることができる。
- ⑤ 中河内の諸遺跡は庄内式古相段階に一斉に出現する。しかし、その後のあり方は一様ではない。大きく分けると、布留式古段階に消滅する遺跡と、それ以降まで継続する遺跡に分けられる。前者は旧大和川流域の下流に位置するものが多く、後者は上流に位置するものが多い。

[大和]

- ① 盆地内のほぼ全域に、遺跡が分散するようにして存在する。中河内地域のような複数の遺跡にわたる広大な面積をもつ集落はあまり存在しない。
- ② 奈良盆地東南部の纏向遺跡や柳本遺跡は主として庄内式土器を使用し、それ以外の地域の遺跡は主として第Ⅴ様式系土器を使用するという傾向が窺える。
- ③ 外来系土器は庄内式期新相段階に急激に増加する傾向にある。その分布は盆地東南部の成願寺遺跡、柳本遺跡、纏向遺跡に集中する。
- ④ 外来系土器の種類については、東海系・近江系などの東日本の土器が多く、山陰系などの西日本の土器が少量混じる。故に大和では東日本との交流は盛んであったものの、西日本との交流はあまりなかったと考えることができる。
- ⑤ 盆地内の諸遺跡は庄内式古相段階に一斉に出現するが、その後のあり方は一様ではない。大きく分けると、布留式古相段階に消滅する遺跡とそれ以降まで継続遺跡の二者がある。前者は盆地縁辺部に位置するものが多く、後者は平野部、特に盆地北半部に位置するものが多い。

以上の観察結果をもとに検討を行うと、奈良盆地の東南部と中河内の大和川流域沿いの遺跡には

- ① 主要な土器が庄内式土器であること
- ② 東海系土器が周辺の遺跡よりも多く出土すること
- ③ 若干のズレはあるものの、基本的には庄内式期古相段階に突如出現すること
- ④ 広大な面積を有すること

という共通点があることを確認でき、故にこれらの遺跡には何らかの関係があったことが想定できた。

そこで、大和盆地東南部の代表的遺跡である纏向遺跡について詳しく検討してみたところ、住居遺構が1×2間程度の小規模な掘建柱建物ばかりであり、竪穴式住居がほとんど存在しないという状況が確認できた。大和においては竪穴式住居が主流を占めており、この遺構の在り方は異常としか言いようがない。しかし、近隣に存在する箸墓古墳の存在がこの異常さを正当化すると考えられるのである。つまり、全長280mもの規模を誇る前方後円墳を造営するために、大和以外の地域から人々が集まった結果、一時的住居が必要となったのである。継続期間が短いこと、箸墓古墳の出現と基を一にしていること、他地域の土器が多量に出土していることなどもそのためと考えられよう。

次に、同じような特徴を有することが確認された旧大和川流域沿いの遺跡について検討してみたところ、複数の遺跡に渡って広大な面積を有すると考えられる集落が複数存在し、その範囲内から多くの竪穴式住居、掘建柱建物、方形周溝墓などが多数検出されたことを確認できた。このことは、同地にて多くの人が定住生活を行っていたことを物語るといえる。また、その立地上、西日本から物品・情報・文化など持ち込まれる一大流通拠点であっか可能性が極めて高い。

以上のことから中河内と大和を比較すると、大和よりも中河内に多くの人が住み、同地は恒常的に活況を帯びていたと考えられる。現代の言葉で置き換えれば「都会」といったところであろうか。しかし、これは中河内が政治

的中心地であったということを意味するわけではない。この点については現時点までそれを裏付ける遺物や遺構は確認されておらず、今後検討されなければならない問題として残る。

結局、本稿では古墳出現期における中河内の重要性を指摘する結果となった。従来、箸墓古墳の存在が大和、特に奈良盆地東南部のみを安易に重視する傾向が認められるけれども、このことに対しての警鐘となれば幸いである。